

ICTは遠隔教育をどう変えるか：
学習と共同体づくりの観点から
(学習ネットワークと生涯学習：
公開シンポジウム「学習ネットワークと生涯学習11
」)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村山, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006810

ICTは遠隔教育をどう変えるか ——学習と共同体づくりの観点から——

村山 功（静岡大学教育学部教授）

■遠隔教育（通信教育）

今日の話は、最終的には学習と共同体や共同体作りに結びつけたいと思っているのですが、キーワードとしては、対面教育、そしてそれと対峙する形で遠隔教育（通信教育）、さらにICT（情報通信技術）の導入による変化です。

遠隔教育という言葉は、あまり聞き慣れない方もいらっしゃるかもしれませんが、普通は通信教育などと言われるものです。皆さんの中で通信教育をやったことあるという人はいますか。私も2回やりました。中学生の頃にラジオ講座をやってだめで、大学院生の時に、アルクのヒアリングマラソンをやって毎月レポートを出すのですが、最初の1ヶ月しか出ませんでした。ですので、実は遠隔教育はあまり信じていません。

教育の場面では基本的に、話をする人間より聞く人間の方が圧倒的に多いという構造があります。それは対面教育でも遠隔教育でも変わらないわけです。小学校から大学まで、教える人間の方が待っていて、「学生さん、みんな来てくださいね」という形の集合教育なのです。

ところが、社会人のように、簡単には集まれないような対面教育が困難な人たちもいます。では、講師が順番に回ればいいのかといえば、一人ひとり先生を呼ぶお金もないので現実的ではありません。そこで遠隔教育（通信教育）が出てくるわけです。近くに学校がない人でも学習機会を確保できるという意味で、遠隔教育は非常に大事な教育の方法なのですが、冒頭にも言いましたように、学習の継続が非常に困難であるという問題があります。

最終的には、それをICTでどのように片づけるかという話になってきます。だから、そもそも遠隔教育自体、教育の方法としてはかなり厳しいということをまずご理解をいただきたいと思います。対面教育が必ずしもいいかどうかは分からないわけです。実際このように皆さんが集まって、私と面と向かってはいますが、では、皆さん一人ひとりに私が対応できるかといえば、全然そのようなことはないわけです。

■従来の遠隔教育の抱える困難

そのような意味で、対面教育だから遠隔教育よりいいかという点、本当はそのようなことはないと思うのですが、遠隔教育は原則的に困難を抱えています。それは通信に要する時間です。郵送などによる通信教育をイメージすると分かりやすいのですが、講師とコミュニケーションをとるのが非常に困難だということです。質問したいと思っても、すぐに質問できない。

それから、教材の一括送付です。通信教育をやったことがある人は分かると思いますが、最初に全部の教材がどんと送られてきて、それを自分で順番にやっていく。だから、大学の授業のように1回ごとに資料が来て、その授業の内容に合わせて資料が変わっていくという形の細かな対応ができないわけです。

そのような状況で学習するものですから、学習状況を教える側が把握することが基本的にできません。資料を送りつけて、テストが返ってくるまでは、送った先でどのような勉強をしているかなどは全然分からないわけです。大学で一人ひとりの学習状況を把握していると言われるのであれば、そのようなことはないのですが、見ていけば「あ、今日あいつ来てないな」という形で分かることもありますし、「あいつ、寝てるな」と起こしに行ったりもできるわけです。そのような形の学習と比べて、遠隔教育はとにかく送ったら何か書いてくるまで何もできないという状況なのです。

そうすると、何か困っているのではないかと思って、「どう？」と手を差し伸べることもできないわけですし、「今そういうことで行き詰っているんだったら、先にこっちのコースをやってみたら？」と、教材を変えていくような柔軟なコース運営も難しいわけです。

■そこから生まれる問題

結局、そこから生まれてくる問題は何かということ、通信教育・遠隔教育はこちらが教えているという形になっていながら、実際には「勉強はそっちでお願いね」と投げている、ということです。学習者、受講者の方の学習能力あるいは学習管理能力に完全に依存してしまっている。とにかくこちらが教材をどんと送って、まよめの課題を出してくださいと言うまでは、完全に長期間個人学習をしているに等しいわけです。

私が挫折した2つの遠隔教育は、ヒアリングマラソンだったら「1ヶ月間、とりあえずまずおまえが全部英語を聞け」「聞いてから1ヶ月後に何か出せ」という形なので、その1ヶ月間向こうは何もしてくれないわけです。では、自分が1ヶ月間きちんとまじめに英語を聞くかということ、そのようなことはないので、「ああ、めんどくさい」と投げればそれでおしまいです。

遠隔教育は、課題提出まではほとんど長期間個人学習なので、「あ、あれが分からないな」と思っても、そのような質問や疑問は解消できない。「何か分かった気もするんだけど、もしかしたら勘違いしてんのかも」と思うことがあっても、自分の理解のモニタリングはできません。では、本を読むのとどこが違うのだろうかということになってしまう。

遠隔教育や通信教育はコミュニケーションをとるのが遅いために、かなりの期間、完全に個人学習になって、学習者が頑張ってくれないと全然機能しません。そのような意味では全然教育していないに等しいわけです。それが従来の遠隔教育でした。

■メディアの多様化

そこに新しいメディアが入ってきました。これまで印刷教材だけでずっときていたのですが、それにビデオ教材などが入ってくるようになりました。たとえば「こどもちゃれんじ」や「しまじろう」のような教材にはビデオ教材が付いてくるように、教える側の表現手段としてさまざまなものがあります。

通信教育のギター講座やフルート講座などでは、今まではテキストとレコードぐらいしかなかったわけですが、ビデオで実際に演奏しているところを見せてくれるようになって、教える側の表現手段は少し良くなっています。

その後、パソコンのソフトも教材として付けられるようになり、こちらが何か入力すると答えが返ってくるという形で、インタラクティブな関係を作れるようになりました。これが本当にきちんと設計されたソフトウェアであれば、自分の誤解に合わせて向こうの教え方を変えてきて、確かめのテストも変えてくることができます。つまり、私の回答・私の間違いに合わせて教え方を変えて、最後には正しい理解まで運んでくれるというパソコンのソフトが作れるわけです。実際に作られて送られて使われているものはそのような立派なものではなく、パソコン上で単純に動画が出てクイズができるくらいのソフトなのですが、少なくとも表現手段は多様になって、学習者とインタラクティブに協議行動がとれるようにはなっています。

■通信技術としてのICTの活用

しかしこれだけでは、基本的には学習者任せという問題は解決できませんでした。そこで出てきたのが、FAX、電子メール、掲示板など、通信技術としてのICTです。

こうなると通信にほとんど時間がかからないので、質問や答案提出は非常に早くなって、質問や答案への回答も早くなってきます。あるいは、みんな最初からまとめてどんと教材が来るのではなく、「ここまでできたら、次の教材送るよ」と小刻みに学習ができるようになりました。

そのような意味で、少なくともネットワークに頼ってコミュニケーションが容易になり、かなり問題が解

消されてきたように思えるわけです。

■サポート

しかし、そこまでやってみたら、やはり問題がかなり出てきました。たとえばe-learningで、どこかのホームページにつないで学習するという場合、いくらコミュニケーションのスピードが上がっても、アクセスしてくれないことにはどうしようもないわけです。「毎週必ず1回は来てね」と言っても、向こうがアクセスに来てくれないと仕方ありません。そのような問題というのはやはり残ったわけです。

この問題を解決するために出てきたのが、メンターという制度です。メンターとは、継続的、定期的に交流して、信頼関係を作りながらメンティーの（学習者）の学習を支援することです。つまり、学習の伴走者のような人がいて、学習者・受講者の方から何か言ってこなければ、「最近、全然アクセスに来てないけど、どう？」「何かわからないとこはないの？」と、こちらからメールを投げてしまおうということです。そのような役割が重要だということになって、今はこうした活動もずいぶん入れるようになっています。

■対面教育と共同体

ここでもう1回、対面教育に戻ってみますが、学校における授業作りと学級作りは切り離すことができません。小学生の頃のことを思い出してほしいのですが、授業とさまざまな活動がごちゃ混ぜになって、学級がきちんと運営されていると授業もきちんとできている、という関係になっています。特別活動をやったり、行事で体育祭をやったり、合唱コンクールをやったり、いろいろな活動をやって学級としての一体感を作りながら、その学級の中で授業をするというような学習を小学校からずっとやっているわけです。

たとえば掛川西高だったら、入学した時に1泊2日で新入生の宿泊合宿をやって、そこでまず学級作りをします。それまでまったく面識がなかった人たち同士で合宿訓練をやって、そこで顔見知りになり仲間意識を作ります。その後、3日間かけて高校の勉強の仕方を教えて、それから学習がスタートするという仕組みになっているわけです。

皆さんも、入学してしばらくすると自治会の主催で新歓をやり、合宿をやり、初めて会った仲間と仲よくなって授業がスタートするという形になっていたと思います。だから最初にガイダンスをやる時にはみんな知らない者同士で、こちらも知らないの何となく対等な気がしたのですが、合宿が終わって帰ってくるとみんな仲良しになっていて、こちらだけ仲間外れという、そのような関係ができていたりしていました。

このように刺激し合い、支え合い、学び合い、たまには競い合ったりいがみ合ったりするような関係を作りながら、そのような中で学習を進めていくように学校教育はできているわけです。授業内容についてだけでなく、「何か村山の授業、たるいよね。何かあの人の話まとまりないしさ」とか「妙に早口だし」という話をみんなで言い合いながら仲間作りをして、そのような共同体作りの中で学習も起こる、あるいは学習の中で共同体も作られていくということをこれから目指していかなないとまずいのではないかと考えているわけです。

■ICTによる共同体の形成

このような共同体を形成するということについて、例として「モバゲータウンのコミュニティ」を挙げて説明してみようと思います。「モバゲータウン」とは、携帯でオンラインゲームを楽しめるサイトです。

モバゲータウンでは、「初めての方へ」として次のように書いてあります。

モバゲータウンって何というあなたに、この街での遊び方を案内するね

モバゲータウンは、ゲームやデコメが無料で遊べて、サークルや日記で、みんながつながるサイトです。

ゲームは、超ハイクオリティーで本格的なRPGや対戦ゲームから、ミニゲームまで盛りだくさん。

デコメは、3キャリア対応で、かわいいデコメ素材が毎日更新。

さらにサークルの掲示板やかわいいアバターの着せ替え、ブログのように日記も書けちゃう。これらぜんぶ使ってもタダ。

モバゲータウンは、基本的にゲームをするためのサイトなのですが、ゲームだけのサイトだと集客力があまりなく、リピーターになってもらえない場合もあるので、デコメや掲示板やアバター、ブログという形でそこに居ついてほしいわけです。そこを共同体にして自分の常駐場所にしてもらうことによって、いつでもそこに遊びに来てもらうという仕組みを作っているわけです。

ネットワークを使っているいろいろな学習環境を作っていく中で、メンターが学習者と併走しながら、常に学習者に声をかけていくということはいいのですが、それはやはり個人とメンターだけの関係です。学習者同士の関係を築いて共同体を作っていくしないと、お互いに「また、勉強に来よう」という環境ができません。

■学習仲間の臨在感

では、学習者同士が共同体を形成するために、どうしたらいいのか。定番の技術は、今のところまだないのですが、たとえば「こんな手もあるよね」ということを紹介します。

たとえば、オンラインでビデオを見ながら学習していても、自分一人で学習しているという気持ちは消えません。これをニコニコ動画のシステムを使ってクリアしようという作戦です。ニコニコ動画とは、ビデオを共有するシステムです。誰かが作った映像を見るだけです。これだけだと一人でビデオを見ていることと変わらないわけですが、ニコニコ動画ではコメントをみんなが書いていくことができるシステムになっています。同じビデオを見ている、いろいろな人のコメントが出ていると、他の人と一緒に見ているような気がするという発想なのです。

遠隔教育の授業ビデオを見せている時に、みんなで「あ、こことこ大事だ!」と思ったら大事ボタンを押すというシステムを作って研究している研究者もいます。同じビデオを他の人が見た時に、大事ボタンがたくさん押されたということが分かるような合図が出てくるようになっていて、自分以外の人も同じ教材で勉強しているのだという気持ちを共有することができるというシステムです。

ネットワークの技術を使って、私たちはどちらかというと、ある教室の中であらかじめネットワークを入れておいて、そのような技術を使ってコミュニケーションをとるといった研究の方法をとっていますが、普通は通信教育などを受けに来る人同士はみんな面識はないわけなので、そのような共同体がないところで、どのようにして自分は一人で勉強しているのではなく、周りの人間と一緒に勉強しているのだという気持ちになってもらうのか、ということを考えるのも大切だと思います。

もしそれがうまくいけば、お互いに「最近来てないけど、どうなの?」というようなことを、メンターが言わなくても周りの人が言ってくれるような学習環境が作れるかもしれません。そのような共同体づくりにICTをどのように使っていくかということが、おそらく今後の遠隔教育の中では一つの大きな問題になっていると私は考えています。